

2024年度

愛 知 の 特 別 支 援 教 育
(第53集)

目次

I はじめに..... 2

II 授業実践..... 3

III 第74次教育研究活動のまとめ..... 4

1 人とかかわる力を育てるための指導..... 4

2 学習指導をどうすすめるか..... 4

3 特別支援教育をどうすすめるか..... 5

4 助言..... 6

5 まとめと今後の課題..... 7

愛知教職員組合連合会 教育課程研究委員会特別支援教育部会
2024年度 教育課程研究委員

ブロック推薦 ◎部長 ○副部長

名古屋			尾 張			三 河		
名前	単組	分会	名前	単組	分会	名前	単組	分会
古澤 安里	名古屋	南特別支援分校	佐藤 清則	一宮	三条小	今泉 真則	新城	鳳来中部小
森 はるか	名古屋	有松小	片出 佳江	西春	訓原中	松田 優佳	岡崎	美川中

第71～73次教育研究全国集会レポート提出者

71次			72次			73次		
名前	単組	分会	名前	単組	分会	名前	単組	分会
―――	――	――	○近藤 奈歩	名古屋	西特別支援	○原 暁良	名古屋	矢田中

第69次教育研究全国集会レポート提出者 ◎田口 孝典（海 部・永和小）
第74次教育研究全国集会レポート提出者 伊藤 真之（名古屋・藤が丘小）

I はじめに

地域や学校などにおける障害のある子どもたちをめぐる動向は、本人や保護者の教育に対するニーズの高まり、卒業後の進路の多様化、インクルージョンやダイバーシティの理念の浸透などがみられるところである。すべての人が生活しやすい環境をめざす「ユニバーサルデザイン」の考えは、さまざまところにいかされるようになり、障害がある、ないにかかわらず、すべての子どもたちに適切な支援をすることの重要性が理解されるようになってきた。そのため、支援を必要とする子どもたちのニーズを把握し、学校・家庭・地域が連携して支援を行っていくことが強く求められている。

特別支援教育部会では、「ゆたかに生きるための力を育む」というテーマのもと 16 本のレポートが報告された。子どもの教育的ニーズを的確に把握し、学習意欲を高めるような学習活動や教材の工夫をした実践、人とかかわる力やコミュニケーション能力を高める実践、個々の子どもの発達の状況に応じた生活単元や自立活動の実践、子どもの実態についての共通理解や通常の学級での支援方法に関する実践などが報告された。

これらの実践で行われたように、子どもたち一人ひとりのもっている能力や個性を最大限に引き出し、学習の成果が生活にいかされていくことで、子どもたちの自信を高め、自立や社会参加の基礎を育てることができると考える。

そして、人とかかわる活動や作業的・体験的な活動を多く取り入れて学習にとりくむ中で「生きてはたらく力」を育むにはどうしたらよいか、学習した内容を日常生活にどのようにいかしていくか、子どもたちが前向きに学んでいけるようにするには、教員が子どもたちへの理解をどのように深めたらよいのか、などの観点から教育内容を検討していきたい。

Ⅱ 授業実践

自分に自信をもち、主体的に物事にとりくむ生徒の育成 ～グループ通級の活動を通して～

名古屋市立矢田中学校 原 暁良

(1) はじめに

本校発達障害通級指導教室に在籍するAとBは、「自分なんて」「どうせできないから」「自信ないです」など活動のはじめから自信がない発言をすることが多い。さらに授業やグループ活動に消極的で、自分の意見が言えなかったり、思いや考えをみんなの前で発言することが難しかったりする姿がみられる。そこで、本研究では、グループ通級の活動において、安心して挑戦する場を設定して、主体的に活動にとりくむことができるようにしたり、活動の振り返りを工夫したりして成功を実感できるようにした。与えられた役割を果たし、客観的に振り返ることで、「自分はできる、役に立っている」という自己効力感を高めて、自分に自信をもつことができるようになって考え、実践を行った。

(2) 実践の内容

(ア) 安心して挑戦することができる場の工夫

通級ミニ会議を開き、グループ通級の計画を考えた。ミニ会議は、安心して発言することができるよう、ブレインストーミングを意識させ、否定をされない雰囲気をつくって自由に発言をすることができるようにした【写真】。また、グループや個人の目標を立てるようにすることで、目標が明確になり、自分中心の考えではなく、グループ全体のことも考えることができるようになってきた。



【写真】ホワイトボードに案を書いている様子

(イ) 成功体験を実感できる振り返りの工夫

グループ通級実施後、参加メンバー全員で感想やフィードバックをもらう活動を行ったり、動画を活用して客観的に自分の姿を振り返ったりするなど、振り返りを工夫することで、2人とも自分の行動を振り返り、次にいかそうとする姿がみられた。通級ミニ会議終了後も、2人は教室で話し合っていた。自ら主体的にとりくむ姿がみられた。

(ウ) その後の様子

Aは授業中に自分の考えを記述する場面でねばり強くとりくめるようになったり、以前は問題がわからないことに対してイライラしていたが、落ち着いてとりくむようになったりするなどの変化がみられた。Bは、普段、友だちとかかわることがなく、1人であることが多かったが、友だちとかかわろうとする姿がみられるようになった。下校時には友だちと一緒に帰る姿もみられ、自らかかわることが増えてきた。

(3) 成果と課題

- AとBは、目標を明確にし、課題にむけて、主体的にとりくむ姿がみられた。
- Bは、自分の行動を客観的にとらえることで、課題が明確になり、次への改善の意欲を高めることにつながった。
- 毎回のグループ通級後にミニ会議や準備を設定していたため、時間的に少し負担になっている部分があった。

Ⅲ 第74次教育研究活動のまとめ

1 人とかかわる力を育てるための指導

さまざまな視点から人とかかわる力を育てるための実践が報告された。Google の Jamboard を使って自分の気持ちの表現方法を習得し、人とかかわりの中で自信をもたせた実践、「すなおタウン」というダンボールハウスづくりを通して、友だちの意見を参考にしたり、助け合って作ったりすることで友だちとかかわりを大切にした実践、「オリジナルなかよしカード」ゲームを通してコミュニケーションスキルを高める実践などが報告された。また、食に関する指導の中で自分の食生活に興味をもつだけでなく、ペアや学級の友だちとかかわる場面を取り入れた実践、数学科の授業を通して、他者と協力して課題を解決する時間を設けた実践も報告された。

各リポートの提案を受け、まず、相手の気持ちを理解するために行っている活動について意見が交わされた。よく使われるイラストと写真では理解が違い、イラストではわかっても写真に替わるとつまずいてしまうことがあるとの意見が出された。意見に対し、言葉遣いや声色に変化をつけた音声をイラストや写真と共に提示して教えた、実際に起こった場面でロールプレイをしたり、ふり返りをしたりしながら繰り返し指導した、自分が人と話すときの表情を鏡で見て自分の表情を描くことで理解した、などのとりくみが報告された。次に、交流学級とかかわりについて意見が交わされた。年度当初に特別支援学級の子どもたちの自己紹介を苦手なことや得意なことも含めて行い、学級の一員であることを理解してもらった、特別支援学級の担任が交流学級で授業をするなど積極的にアピールをして開かれた特別支援学級をめざしてとりくんだ例が報告された。最後に、学校内の体制についても意見が交わされた。特別支援学級担任や特別支援教育コーディネーターと協力して、校内全体での協力体制をつくっていくことも必要だという意見が出された。

2 学習指導をどうすすめるか

子どもが主体的に学びに向かう授業実践について紹介されていた。子どもたち自身に活動に対する目標を設定させたり、子どもたちの日常にある身近な事象をもとにして単元を構想したことで、子どもたちは、自ら課題に気づいたり、解決する方法をすすんで考えたりすることができたと報告された。また、実際に具体物を見たり聞いたり触ったりすることのできる教材を用意したことで、子どもたちは、活動に最後までとりくんだり、興味をもってとりくんだりするなど追究意欲を高めることができたという報告された。

各リポートの提案を受け、まず、他学年どうしの子どもたちをどのようにまとめて授業を実践していくべきかについて討論をすすめた。小学校では、学習活動は同じであっても、子どもたちにそれぞれの学年に合わせた教科目標を事前に伝えてとりくませていたり、他学年どうしの学習内容をつなげて単元を構想したりしていると意見が

出た。中学校では、理科や社会科などでは、1～3年生全員が同じ内容を学習し、年度ごとに変えていくことで、卒業までに3年間すべての内容を学習するカリキュラムにしていると意見が出た。

次に、子どもが主体的に活動にとりくむための授業について意見が交わされた。自分たちで種目を考え「ミニ運動会」を計画する体育の実践や、他学年を招待し、学習した内容を発表したり一緒に活動を体験したりすることを目指した単元構想の実践が報告された。その中で、子どもたち自身が考えて活動を工夫したり、単元を貫く大きな目標をもってとりくんだりする授業が大切だという意見が出た。また、交流学級の授業にも参加する子どもがいる場合、授業内容を特別支援学級で事前に学習しておくことで、交流学級の授業にもすすんで参加する姿がみられているという意見もあった。

3 特別支援教育をどうすすめるか

本テーマでは、6人の先生方が発表され、正しく発音する力や自己肯定感の向上、主体的に学ぼうとする子どもの育成などさまざまな研究がすすめられていた。また、多くの研究が自立活動ですすめられていた。研究報告の中で自立活動をより充実させるためには、実態把握・計画の段階から、より多くの教員がかかわり、より多くの引き出しで試行的な指導をしながら的確な把握と計画を行うべきであるという報告があった。

各リポートの発表を受け、まず、自立活動をすすめていく上で苦手な克服をどこまで行うのかについて討論をすすめた。小学校では、少しでも社会に出られるように苦手なことの克服よりも得意なことを伸ばすことに力を入れているという意見が出された。中学校では、苦手な克服よりも3年後の専修学校や高校入試に向けた社会性を身に付けさせていかないとけないという意見が出された。

次に、特別支援教育を校内でどのように広めていくのかについて討論をすすめた。その中で、特別支援教育は、教育の原点であり、個別最適な学びの基礎が特別支援教育にあると感じている。そのため、特別支援学級の担任が中心となり、特別支援学級の授業を参観してもらったり、年に1度特別支援教育の学習会を行ったりして、学校全体に特別支援教育をすすめていく必要があるという意見が出された。また、通級指導教室の教員からは、校内の先生方が特別支援教育の意識を高められるように教員向けに特別支援教育の便りを定期的に出し、通級指導教室での様子や実際の活動事例を載せて情報発信をしているという意見も出された。

4 助言

愛知県医療療育総合センター中央病院 杉山 由佳先生

コミュニケーションについて、特に自閉症スペクトラム障害の子どもだと、相手の気持ちを推し量ることは難しいため、一方的なかかわりになってしまう場面が起こりやすい。その子の状況に合わせてどんな環境をセッティングしていけばよいかを計画的に支援していく必要がある。気持ちの把握の面では、その子に合った方法で表現したり、文字にしたり、数値で表したりして、気持ちを表現することがまず重要である。自分で不安な状態の前兆をとらえ、対処できるようになることをめざして支援をする必要がある。

学習指導については、子どもたちに、いかにやりたいと思ってもらえるようにするか、が重要である。特別支援教育のすすめ方について、境界域の子どもへの対応、保護者の希望、通常の学級で支援が必要な子どもへの対応など、さまざまな問題がある。医療分野からも学校と協力しながら子どもたちの育ちを支えていきたい。

名古屋市立天白特別支援学校 田中 洋樹先生

「人とかかわる力を育てるための指導」について、ポイントは「子どもたちの人とかかわりたいという思いを引き出すこと」である。その思いを引き出すてだてが、今日発表にあったゲーム要素を取り入れた課題設定やスモールステップ、ICT の活用、自己選択、自己決定だと考えている。地域資源の活用も子どもたちの「かかわりたい」を引き出すてだてになりうるので実社会で発揮できる「人とかかわる力」をのばしてほしい。

「学習指導」については、見たり聞いたりするだけでなく、触ったり調べたりする活動を設定することが大切である。「子どもの実態に即したてだてを講じる力」こそ、特別支援教育に携わる専門性の一つである。学習指導に際しては、「指導と評価を一体的にPDCA サイクルで考えること」が重要である。授業実践のあとには、設定した目標や評価規準が子どもにとって適切なものだったか、指導のてだてや配慮に課題はなかったかなどをていねいに検討して授業改善につなげることが大切である。

「特別支援教育をどうすすめるか」において、自立活動の指導については、困難さを克服することに重きを置きがちだが、子どもの得意なことをいかしながら指導をすすめることが重要である。複数の子どもが在籍する学級では、マンツーマンでの指導が難しいとの声を聞くが、学習形態は学級全体であっても、指導内容は個別に設定することがポイントになる。

子どもたちが社会の中で豊かに生きるための力を育むために、私たち教員はともに学び続けていきたい。

5 まとめと今後の課題

子どもたち一人ひとりの実態に合った支援の内容や、指導のあり方についてのリポートが数多く提出された。それらの発表を受け、討論を行った。その結果、教育課程編成の基本的な考え方や課題が明らかになった。

- 人とのかかわるために必要である相手の気持ちを理解する力を育てるには、子どもたちが実際の場面を想起しやすく、自分と友だちとのかかわり方について実感をもって振り返ることができるような仕掛けづくりが必要であることが確認された。
- 交流学級の友だちとのかかわるために、開かれた特別支援学級をめざしたとりくみや、特別支援学級の子どもたちも学級の一員であることを理解できるようなとりくみをするのが大切であることが確認された。
- 子どもが主体的に活動にとりくむために、子どもたち自身が活動を工夫したり、単元を貫く目標をもってとりくんだりすることができるような授業づくりが大切であることが確認された。
- 特別支援教育を校内ですすめていくために、特別支援教育にかかわる教員が中心となり、特別支援教育に関する学習会を行ったり、便りを発行したりして学校全体に特別支援教育の意識を高めていく必要があることが確認された。
- 学年に合わせた教科目標を設定したり、学年ごとの単元がつながるようにしたりしてカリキュラムを構成するといった異学年集団における授業づくりの工夫が必要である。
- 支援が必要な子どもたちの育ちを支えるために、医療機関との連携が求められる。
- 実社会で「人とのかかわる力」を発揮することができるように、地域資源を活用していくことが求められる。
- 子どもたちの「人とのかかわりたい」という思いを引き出すでだてとして自己選択・自己決定の機会を設定することが必要である。
- 困難を克服することに重点を置くのではなく、個々の児童生徒の得意なことをいかしたきめ細やかな自立活動の実践が必要である。